新撰作替小僧集　全

特257
133

始

特257
133

新撰仮名書小篇集

作替小謠集　目次

宮城（高砂、四海波靜かにて）　一
伊勢參宮（邯鄲、國土安全長久の）　一
元旦（花筐、萬代の惠みも久し富草の）　二
大晦日（巴、かくて御前の立ち上り）　三
新郎（鶴亀、庭の砂は金銀の）　四
鎌倉（竹生島、名所多き數々に）　五
銀座（熊野、四條五條の橋の上）　五
早慶戰（鞍馬天狗、花咲かば）　六
レビュー（田村、白妙に雲も霞も埋れて）　六
スキー（鞍馬天狗、花咲かば）　七

マネキン（羽衣、迦陵頻伽の馴れくし）　七
ちんどんや（高砂、げに様々の舞姫の）　八
角　力（鐵輪、いふより早く色かはり）　九
祭　（天鼓、打ら鳴らす其聲の）　十
見　合（胡蝶、四季折々の花盛り）　十
花　嫁（老松、嬉しきかなやいざこらば）　十一
戀　妻（高砂、四海波靜かにて）　十一
夫歸らず（猩々、潯陽の江のほとりにて）　十二
妻　（松風、寄せては歸るかたをなみ）　十三
夫婦喧嘩（烏帽子折、かやうに祝ひつゝ）　十三
久　松（融、げにやいに〜〜も）　十四

光　秀（鍾馗、槿の花の上なる）　十五
大高源吾（羅生門、つくぐと春のながめの）　十五
赤　垣（玉葛、ほの見えて色づく木々の）　十六
夜逃げ（鞍馬天狗、花咲かば）　十七
鬼ごつこ（景清、目こそ闇けれど）　十七
魚づくし（通小町、拾ふ木の實は何々ぞ）　十八
鼠　（竹生島、緑樹影沈んで）　十九
微　醉（竹生島、緑樹影沈んで）　十九
酒盛の段（海士玉の段）　二十
酒の段（鵜飼鵜の段、この川波に）　廿二
破　衣（羽衣、東遊の數々に）　廿四

藝　者（芦刈、あれ御覽ぜよ御津の濱に）　廿五
獨り　者（羅生門、つくづくと）　廿六
失　意（俊寛、飲むからに）　廿七

宮城（高砂、四海波靜かにて）

上瀧の水靜かにて。影を宿せる三重
橋。命のうちに拜がまんと。遠き辺
より。貴賤男女のわかちなく
。実ゝかや榮すがた。濱にちらしの花
をつけ。都をとうて集ひ來る民

のまごころ尊すや民のまごころ尊
しや

伊勢参宮（郡鄙、國土安全長久の）

上　家内安全息災の。家内安全
息災の。願もいやましに殖たり
さらまさる猿の。伊勢の大宮と

くとくといざやゐかうよ。うつるや
車窓乃。うつるや車窓の。景色い
美しく豐なひかれてとく見ぐれば
手まづさぐる菊の酒の。辟の心
地も面白くて見るも聞くも物珍
らし。大神の宮よ。参る猿ぞうれ

元旦（花筐、萬代の恵みも久し富草の）

萬代の春たちかくる初日の出。春
たちかくる初日の出。君も栄ゆく
春の宮。道ゆく人も時めきて軒ま
かぎろふ門松の。松も心も新みて

雑煮を献ひつ。君水神へ
捧げん君水神へ捧げん

大晦日（巳、かくて御前を立ち上り）

かくて仕舞ひたぶ踊り。見れば掛けと
り大勢。けふ兎も角大晦日。あまず
お踊すあとてんでん内へ。入れば。今

い留守ともこらるまでいでまうあ
うるさやと。其所でおしも騒がずわ
ざとかけとり晩くまうとんと。長ことと
寝そべりいやまを落付く気色あれ
ばかけとりいらつてくつてかうればけく
気長く對手にあつて。そのうち特
ふの角角拂ひ。一所は特へ返
す。米屋も大家も皆のあらひ
枕をしたまつかうあひければ皆一
同に腹立てたれどあとは軒で知ら
ざりけり。あるもかまらず知らぬ
りけり

新部（鶴亀、庭の砂は金銀の）

上　庭の砂は玉川の。庭の砂は玉川の。清さ玉砂利数をもらし。館は
本雪路の板橋。都鄙をはなれて
森深く。新たにたぐる泉水は。錦鯉
真鯉の群居つゝ。げふ顔ひあき館

かちなげふ顔ひあき館かな

鶴倉（竹生島、名所多き数々に）

上　名所名所名所名所。鶴倉や。名所名所名所名所
倉や。八幡宮かてあがもれば。古き
都山く昔あがらの田舎が濱。長谷
のぼ堂の観世音。いざ大佛へゆき

て見ていぐ大俳ゆくてんん

銀座（熊野、四條五條の橋の上）

ヨウ上
花の銀座の四つの辻。花の銀座の
四つの辻。老若男女モボやモガ色あ
く花衣袖を連ねて銀ブラや。雲
居ふ高き丸ビル。ネオンライト乃

カフエバーなるあふ夜の景色かなる
みあふ夜の景色かか

早慶戰（鞍馬天狗、花咲かば）

ヨウ上
けふこそいのちんものと早慶の。人ら
んものと早慶の。野球試合の豪華
版はや外苑に人の波。互にせんをあ

らそひて。いつともわかぬ探あれば
ぬ隠る逃れていざゝ。時を待た
うよ

レビュー（田村、白妙に雲も霞も埋れて）

白肌ふ羅衣かすか纏ふのみ。冠衣
かすか纏ふのみ。いづれあとゝぬあで
ゞ。美しやゝ面白やげる心地よき
春の宵。四方の人ごゝよりすがら。時
も忘る眺めかな時をも忘る眺
めかな

スキー（鞍馬天狗、花咲かば）

雪降らば上ク。雪降らげんといひし山里の

ぱっげんといひて、山ぶしの。知らせぬ来
りスキー持ち雪のおもたづね来
て。滑ると見るや仏まろび。雪け
むりとそ立ちつづく。渡れのあまり
第絶と。雪を見るのみ

マネキン（羽衣、迦陵頻伽の馴れくし）

マネキン嬢のあれくし。マネキン
嬢のなれくし。聲今更よつくろ
ひて。夕べの歸り行く人をとめ
て美しやいりぐ手をおさめて
買ふか買はぬかねども花と見
るまでうつくしや花と見るまで

うつくしや

ちんどんや（高砂、げに様々の舞姫の）

げに様々の姿して、顔も顔や面白く、街並もまはるまはる、ちんどんやとはれやらん　鐘と太鼓を打ち鳴らし、都の春をいろどりて

ゆくぞ開店披露ある　さて先頭の旗持も　おどり狂ひてピエロの姿、つゞく女は三味線いだき、流行唄をば弾きならし、其外仮装とりくみて、賑はしの町角高々と今ぞ弘めん弘めごと今ぞ弘めん

角力（鉄輪、いふより早く色かはり）

引くより早く立ちあがり。引くより
早く立ちあがり。はたき返して對
手にハ。見事組むかと見せつるが。手
取の得手の双手。さすや砂煙。あ
ぶないことこそ人の。思ふ間ぬ投げ

倒し。勝ちみの角力とつて人ぬ強さ
知らせん。よそ客ぬ張美ぬらん

祭（天鼓、打ち鳴らす其聲の）

打ち鳴らす笛ぬ鼓。打ち鳴らす
笛ぬ鼓。鎮守の森ハ。どんどことぬ打
つなり打つなり囃子の音に。舞ひ

舞ふ氏神の名ふの神樂に面白や

見合（胡蝶、四季折々の花盛り）

とゝいこゝハの花盛り。とゝいこゝハの花盛り。相手に心をかけまくもこゝゝ見合のところうかゝ。すがた内氣まうつむきて。菓子紅葉風流に

見つゝ。産讀まるゝ聲ごのみ
耳ふのうれど縁にこゝ通すぐも
ゆ情しや

若嫁（老松、嬉しきかなやいざゝらば）

嬉しきかなやいそくと。嬉しきかあやいそくと。洗仕くまつれられて

胸もとをめくり晴の式。神の結びを
待ちて居ん神の結びを待ちて
居ん

戀素（高砂、四海波靜かにて）

上丸髷と結ひあげて。肉をさまる
時ぞ来て。押しも押さるぬ女房振
り。こ人氣も合ひの。夫婦ぞめで
なりけれ。げみや夜逃まで。やり
かけし身をとこの様よ。はからひ呉
れ情ある。伯父の恵みぞ有難
き伯父の恵みぞ有難き

夫婦らず（猩々、潯陽の江のほとりにて）

上ツヨク鉄瓶の湯をたぎらせて。鉄瓶の
湯をたぎらせて。炉ばたにて夜
もすがら。机によりてまつや。又
ひぐらしなる暁の。鐘をかぞへて泣
き居たり猫をかぞへて泣き居
たり

素（松風、寄せては歸るかたをなみ）

上ヨワク辭うてゝ歸る千鳥哉。辭うてゝ歸
る千鳥哉。まゝ子の。居ぬそゝ立ち
騒げ。我が家の素のふくれづくこの
夜何と濟まそん。更け行く月こそ
哀しけれ。辭も覚め素体や。せんづ

言訳(イイワケ)よ必せよ。そのみあど氣おく
れの憂を素のみを持つらん。待(ウヤ)
つ姿夜ふけの門ふわが素の影を
見るこそ苦しけれ影と人ならこそ
苦しけれ

夫婦喧嘩(鳥帽子折、かやうに祝ひつ)

かやうに叫(シテ上ヨク)びつつ 和ちく算(地上)盃引
きあけて。あらかふこつ四つの不
動(ガン)者ちんど取り出だし。素早(スミヤカ)く
夫たくして召し通て。あひそと風
呂敷こわきよりかい抱きと立ち出でて見
れど。夫張(ツメ)と氣(ヤ)ろ。そ婦の

裏屋と申すとも不足よもあらじ

久松（融、げにやいにしへも）

げにやいにしへも憂ふる人目はづかしく。意ふる人目はづかしく。倉乃中なれば久松侍つひともくるかやと窓のあたりに落れ。さてわれも

憂ごころ。お傳のこゝろをとゝすまし胸のとゝめをを静めんや胸のとゝめをとゝを静めん

出秀（鐘馗、槿の花の上なる）

夕顔の棚の下なる闇よりも。現れ出でたる光秀。あるかなきかの音

思ひ。羽袋の影をつゝぬけば。ねら
つる敵の方にあらでゆかでの毎の一
聲も。かの不忠をか諫むらん。哀れ
ありける有様彼かゝ彼せぞるべき

大高源吾（羅生門、つぐゝと春のながめの）

上
つぐゝとわが方のゝの伝ひ〜きい

わが身のよの伝ひ〜きい。思ひ姿の
扇の様仲京くて。獨ながむる橋
のゝ折からゝ語らゝ寶井ゝ。発句す
すめて真心をとゝぐかたる宝船
やたけ心の待つ方ある。俳諧のまゝ
ゝ心ゝ今日の別れかか

赤頭（玉蕚、ほの見えて色づく木々の）

ほゝ碎ひて色づく穎の赤頭。色づく穎の赤頭。風も到りて雪の日に。別れも進りぬ。このの。さぞお心も乱れ草。借衣の音までげゝ。穎ひあやあつかりや。物音聞える兄の家。のり

かねたる門の戸。降りつむ雪のたえ〳〵の別れ。雪のたに濡らす袖かな。別れ

夜逃げ（鞍馬天狗、花咲かば）

金もなくば生げんといひ〳〵金貸の。生げんといひ〳〵金貸の。使ひ来り

車出せ夜逃げの時の忙しさ。手創顔創かまわずに。塵も強さず積逃げて。走るよかくれていぞく。様子眺めん

鬼ごろこ（景清、目こそ闇けれど）

目こそ闇けれど。目こそ闇けれど

も。人の呼ぶこゑ。鬼さんこちらといふものを。逃げども。すがるそこを見ぬ童叫ぶ稚児のに情しさ。備また度のわの母よつかまつても。聞ゆるいかからかひの声やらんさすがる我もくちをしく。鬼ごろこなりけり御

聲はいづこにか、

魚づくし（通小町、拾ふ木の實は何々ぞ）

海の魚は何ぞ。海のさかなは何ぞ。いろ〳〵ぞ。加に似たるは
うろこの光る。かの魚。貴人の家
乃きかあれ。近海の甘きたる鯛

北の海の鮭鱈。春の鰯。秋の鯖。花
の名ある櫻鯛。樱麻呂の。ほかる鱈烏
賊章魚もあり。鰈鯉をすすぐ
大小鰯あんかう。言れすがたのおか
しさ。河豚猩灯のひとつ。河豚
提灯のひとつ、

嵐（竹生島、緑樹影沈んで）

廊下にひそんで。魚菜を盗む氣配あり。時膳よりぼつてい嵐も客を裏似るか憎らしの部屋の様子や

微醉（竹生島、緑樹影沈んで）

緑酒微醉ひていて。美女を抱く男ひあり。美女枕頭に媚びぬれば財布も底をはたくか面白の酒の機嫌や、

酒盛の段（海士、玉の段）

「其時人ぐ力をそへつきあひぬてを弱

来る一つの壺を受け持つて「彼の客
奪る喜びのれば。そこらあたりの酒
の香。煙の浪をものぞつて。壺満く
と受けついで。飲まうとすれど深く
なく相手も知らぬ酒盛りそも勘
定いとまなく。飲み得ん事は不定

あり。かくて一湯より到りて。連れを見
れば喜様いこと外のの大壺より。彼の酒
をうかめ置き心をとめて曰く人い
ば人奪み居たり喜外乱舞だごら
歌。地れて舞ひ踊りや沈座歌。すが主客共
系の集へる事ぞうれしき。あの家

のあるかたすぐで。我が堂らあらうん牧
みは書もおらすうん。さるうてもこの
まうよ。例れ男あんくやしさとよ
ろくとうちしが又男ひかりて手を
合せ。南無や冥界の酒吞童遠力を
合せて拝みゐへて。大事の重頼よ

あて彼の連中よ飛びのれば。なが空へ
ばつとそのいたりける真深よ鍬子
をぬすみ取つて逃げんとすれば。四
天人おつかくと来てたくみ事あれ
ば。持ちたる鍬子を取直し。剛の下
をかとあけ鍬子を押しこめ重蓋て

てぞ所〜たりける酒盛の習ひ、酒
礼をとゝめば。あたりよりづく恵友か
〜鈍亦の者と呼び起せば人ぐ悦び
引きよせげたりけり至い知らず徳利
はらばひよまろび出でたり

酒の力あり（鵜飼鵜の段、この川波に）

シテ上「さ」お座敷で「ワキ上」ばかと「シテ上」騒げば、「地上」両日
の酒もりや。両日の酒もりやそこで
羅生門の縁くこ味よ。いやがる舞子
よ迎ひまりか。かづきさらげ抱きしめ
酒をかく酒を飲む時は。羅生門も新いも
後の勤定も忘れ果てるおもしろや

皆のむ酒のさかなるは。生簀の鯉や
作らんまゝ焼蒲鉾あるねどもか
鮎さばるしぶみ汁。片方の魚は
まだ喰べず。不思議やか烟徳利
飲んでゐる酒の種くあるは。思ひ出で
たり空ふりぬる姿ゝ。ゝ。屋敷

の騒ぎはや過ぎて。夜更けて帰
る迷方の名誉情ゝ。ゝ。いかるせん
名誉情ゝ。ゝ。いかるせん

破衣（羽衣、東遊の数々に）

漂れ遊びの老ばくに。漂れ遊び
のゝばくゝ。其名も輝の美揚へと

んと夢中の浮かれかた。あたら楽しみも尚とあり。批難災難極道病に気。越蕩こ時よ鼻毛をのばし笑窪にて金をつぎこみ給ふさるほどに。借りまくりて。やけの捨鉢。気まかせふばらまくばらまくばらまく。かりへ

まつぱりふところのかりの。借の高山富士のたかね。返せずなりてあられ晩日の。夜中よまぎれて。出せるけり。

羅生門

あれは答えぜよこつ指つき。夜敢つ

くろひあでやかなる。やかなりくと
ひかりまるでやう（北上）（ヨクカルク）なるまであり仏姿
なるに。あり仏姿。唄うも久かたの
寿まで待てば根引せん。金をこのみ
る。うそのかけひをと詠みあげる
調をもひくこの時の。数やかなるまめ

く有様あれはせるやうぐ（ヤア）あ
ちらも心あらん（北上）こちらにも心
あらん。人をばやこの仲と。二人
ばかりの奥の座敷。そゞろうるも集が
れまる胸のせつなさもにつれ
だちて去呼ぶ。また飯屋へ行く

らん

獨り者（羅生門、つくづくと）

つくづくと春のあがめの寂しさ
春のながめの寂しさ。田面みつた
ふ。川のせらぎゆるやかに。獨ながめ
むるまぐれ。下宿住居の我身
まん。傳ひ語らふもあくとうぐ
あれや我が心。あきらめたれど
ぼんのうの。おさへ難くもこちら
ず春の宵こそわびしけれ

失意（俊寛、飲むからに）

飲むからふげうみも薬と菊水のげ

うも葉と共に、水の心の底も白衣の
濡れて干す。銀座の街の露路の
間々。我もくさ手を拭る心ちする
ルンペンさてもいつまでぞ。春過ぎ
夏たけて又。秋暮れ冬の来るを
も。ポプラの色ぞ知らすするやあら

癒の昔や。思ひ出い何みつけても
あられ様屋なる花り時へ。五百萬
千万と喰喰明る咲きそ花。今
はいつかり引きかへて。五葉紅色
の時みれや。持つや夜店の蛍
飲も酒いどぶろくの。流てもまた

昭和九年八月二十日納本
昭和九年八月二十五日發行

新撰
作替小謡集

〔定價金五十錢〕

東京市京橋區銀座西六丁目三番地
著作兼發行兼印刷者　江島伊兵衛

東京・京橋・銀座西六丁目
電話銀座六三六九番
謡本版元　こんや書店發行

著作權所有

終